

## 震災後の子どもたち(20)

### わたしもやじもだつたとき

上崎 溫子



穏やかな晩秋の午後、乳児院の五名が近くの八幡さまに七五三参りに出かけた。その最年長Y君が生後二十九日目、夜勤の保母に授乳されているとき地震が発生。保母は揺れにバランスをとりながら、しっかりとY君を抱き授乳しつづけた——。私どもは恐らくY君の成長の節目にとに震災を思い出すのであろう。

私の勤める社会福祉法人信愛学園は同敷地内に御影乳児院、養護施設信愛学園、御影保育専門学院があり、激震区で、園の前にある二軒の家は、腸がえぐり出されたような破壊ぶりだった。あの朝、ミルクを飲んでいたY君、飲み終えようとしていたA君の他に十八名の乳幼児が眠っていた。突き上げるような動きと大きな横揺れにキャス



ター付きの重い木製ベッドが玩具のように南北に動き、落下の音、食器等の割れる音がいっせいに起きていた。大搖れが収まるとA君をベッドに入れた保母はガスの元栓の確認をし、廊下まで飛散した食器類の破片を台所に掃き入れ施錠。ベッドの柵につかまつて泣き叫ぶ子、ベッドから降り水浸しになった床に転び、泣きながら保母を追う子たち。二人の保母は震えと涙をこらえ、濡れた子らの着替えを始めた。院長が近隣の人々、園児を誘導してきた。

養護施設信愛学園には三歳から高校生までの六〇名が起居し、マンション形式で南館北館の三、四階に、それぞれ二つと六つのホームがある。南三階の①ホームは幼児のみ、北四階の⑥ホームは男子高齢児、他のホームは男女混合で、兄弟姉妹は同ホームである。

あの朝、宿直の保母三人はお弁当を作っていた。①ホームで宿直したF保母も保母室でつな

がっている階段を上り、②ホームの台所でお弁当の仕上げをしていた。小さな揺れが段々ひどくなるのでFは、恐怖のあまり台所に近い和室に駆けよった。途端、縦と横の大きな揺れが襲う。高二のK子は揺られながら「何よ、何なんこれ」と叫び、Fも「何よ、何なん」と口走る。あちこちの部屋から泣き叫ぶ声。家具は全て倒れ、子どもを家具の上から引きあげ居間に集めると、①ホームの泣き声がきこえてきた。①ホームの玄関のドアは外開きが幸いした。倒れた家具を除け、中に入るF保母に、②ホームの幼児は一刻も離れまいと泣きながらついていく。小学生に踊り場で幼児をみているように言いきかせ、K子と二人で三、四歳二人ずつを抱え連れ出した。一、二階の踊り場で恐ろしさと寒さに震え泣く幼い子らを、先生がいるから大丈夫と、K子も小学生もなだめていた。

やがて階下の玄関から園長と中高生男子が声をかけてきた。①、②ホーム二十名、うち幼児十四

名、着の身、着のまま、幼児は裸足で乳児院に避難した。

保母のいなかつた③ホームでは最年長中二のY子が非常灯の下に集め、部屋から毛布や布団を引きずり出して皆に着せて、指示を待っていた。Y子はホームはグチャグチャ、頭の中もグチャグ

チャ、階下へ降りるときはフーン状態だったと言つていたが、しつかりと行動していた。⑥ホームの男子中高生は、非常階段から、各ホームの安否を問い合わせ、南館に向つた。

明るくなると被害が少しずつ判つてきた。工期の異なる南館と北館の接続した所は一階から四階まで裂け、北館は北に十センチほど動いていた。北館の西側の柱は全て圧縮破壊され、⑥ホームの降りた非常階段は崩れそうであった。誰ひとり怪我もせず無事だったのは、幸運としか言いようがなかった。

御影保専は改築して七年、軽傷だったのでそこ

での避難生活が始まった。乳児院自体も軽傷だつたが、東と南の川の石垣が崩れた危険な状態だったので、乳児も保専に移つた。この後、外部の養護施設へ一週間、全員避難したが、北館の取り壊しと復旧までの一年半、園児は六回の移動を敷地内で繰り返した。

十七日から子どもたちは、水運び、ドラム缶カマドに火を絶やさないこと、洗濯など、当番を組んだ。それはどこの家庭の子どもも同じだった。

不自由な生活であつても、子どもたちは学校の避難場にいる人々よりも随分と恵まれていることを知つていた。

私どもは、被害のなかつた遠くの施設から園児をあずかるという申出を受けたが、既に施設入所という心身共に困難な適応を経験し、震災による不安を抱えている園児にとって、此處で恐怖を共にしたみんなと一緒にいることが気持ちを共有でき、不自由な生活から学ぶことも多い。又、思い

出のつまつた北館が取り壊され、少しづつ再生していく姿を日々眺めることが、災害の現実認識と心の回復になるのではないかと、考え、一人も離ればなれにならないこと、そして被災の地で生活することを選んだ。

子どもと多くの職員にとってのとまどいは、ホームが解体し、南館の二階に男子、三階に幼児、四階に女子という大舎制での生活であった。

そこには、子どもにとって楽しさもあつたが、口にはしない苦痛もあつたと思う。「北館が建つたら、またホームに戻れるね」という声は、子どももたちは大きな問題を起こさなかつた。むしろ、以前に戻つた現在の方がいろいろと起こしてくれている。子どもは今どうなのが、さだかには見えない。震災以前から、彼らは深い悲しみをもつてゐる。

私が子どもだったとき、空襲と疎開、福井大震

災と水害という大きな出来事があった。阪神大震災は、その頃のことを思い出させた。大人にとっては大したことではないかも知れないが、子どもの私には深刻なことだった。

空襲警報で頭巾をかぶり二階から降りようすると階段は爆弾の衝撃で地震のように揺れた。真赤になつてゐる空の方の露地から沢山の蟻のよう人が声もなく走つてくる。こんなに多くの人がいるのかと驚いた。家族は手をつないで、ひたすら堤防を走つた。ふと顔をあげると国防服の老人が泳ぐように、さぐるかのよう歩いていた。目が見えないんだ、消火していく見えなくなつたのだろうかと思い振り返り、転びそうになりながら振り返るうちに老人は人波に吸いこまれていつた。翌朝、焼け野原となつたわが家に戻る道には焼死体があり、しつかりと赤ん坊を抱いた母親の頭には大きな穴があり真黒であつた。

私たち家族は貨車に乗つて疎開した。戦争が終

るまでの一ヶ月、毎晩靴をはいたまま眠り、いつもあの母親のことを、死ぬことを考えた。繰り返し、同じことなのだが、動物は人間と同じように死に、苦しいだろう。だが家具や家は苦しまないだろう。私はどうして人間に生まれてきたのだろうと。戦争が終わると死のことは考えなくなつた。

戦争体験をきくという園児の宿題に真赤な空を美しいと思ったことや、子を抱いた母親の話は出来ても、あの老人のことは話したことがなかつた。何かが私を引きとめた。一月十七日夕方近く、帰宅を急ぐ私の耳に、此處に三人埋まつてゐるのですといふ訴えに、消防士の順番だからといふ答がきこえたが、その方にぼんやりと目を向け通りすぎた。ボーッとした頭にしばらくして、「又、同じことをしてしまつた」と足を止めるものがよぎつた。あの老人の姿であった。

自分の生命がほんのわずかな差で助かつたと思つた人は多い。私もその一人だ。子を失つた親

も、親を失つた子も、もう少しこうだつたらと思つただろう。突然の防ぎようのなかつた自然の

暴力であつてもそつてしまふ。火の迫つてくる中で柱の下になつた友を助けようとして出来なかつた学生たち、親と子、その心中を思うことばがない。私は、あの老人は生きのびたかもしれないといふ望みと、私は八歳だったといふ弁解をしてみる。しかし、私が手をさし出さなかつたといふ、あの時の思いは棘のように刺さつたままである。

だ。

福井大震災は十歳のときだつた。放課後、鉄棒の逆上りの練習を終え、心地よい疲れに身を任せての帰り、東尋坊を横倒しにしたような無気味な色の雲の大群が南に走つていくのを見て、級友と地震でもきそだと話した。その一時間後であつ



た。庭の小路で豌豆をちぎっていた私は気がつくと苺畑の中にしゃがんでおり、母が裏口に現われたとき、家は南に倒れていった。町中の家も学校もつぶれてしまつたので学校に行くとか勉強が遅れるとか考えもしなかつた。

担任のM先生が講堂で遊んでいた生徒を出すために逃げ遅れ亡くなつたときいたのは翌日だつたと思う。お葬式は記憶になく、一年後の命日に御宅にうかがつたのは覚えている。夏休みの登校日は倒れた校舎にもぐつて机や椅子を出す作業があり結構楽しく、みんなきいきしていた。いろんな先生との触れ合いもあつた。二学期になり、M先生の死によつてクラスは二分され、他のクラスに入れられたことは、吹雪くと雪が舞いこんでくるテント教室よりも辛いことであつた。あれから私たちのクラスは、先生の亡くなられた所を通るとき黙礼した。それは卒業後も変つていない。

北館復旧の準備と園児の生活の場確保の作業が

一段落した四月の夜、M先生のことを思つた。私には良くも悪くも三十、四十、五十代を生きてき実感がある。教師一年目のM先生にもご自身の來し方があつたはずだと想うと涙が溢れた。若くして死ぬという悲しみが本当にわかつたように思えた。一月十七日からの騒然とした中で卒園生、卒園生の親、愛することを教えてくれた義母の死をききながら、心にふたをしていた。そうでなければ過酷な日々を耐えられなかつた。

園で屈託なく遊ぶ子らにも、人には決して話さないそれぞれの思いがあろう。園生活を共にしたT姉妹の死にK子はショックを受けていたが、ひとりその死を思う夜もあろう。又、子ども時代には気づかなかつた生活の激変による大人の不安と困難の大きさを知ることもある。それらはみんな生きることだし、大人の支えがあれば、子どもは前に進んでいくものだと思う。

(社会福祉法人信愛学園)